

# 生活科における「実感を伴う表現活動の構造化に関する実践研究（要旨）」 —直観的表現、内省的表現、共有・相互学習的表現による認識の深まりに焦点をあてて—

学校構想サブプログラム

若林 広泰

【指導教員】 宇佐見 香代 磯田 三津子

【キーワード】 実感 表現活動 直観的表現 内省的表現 共有・相互学習的表現 表現活動の構造化

## 1. 目的

小学校生活科では、身近なひと・もの・こととの直接的な関わりを通じた体験活動が重視されている。しかし実践の中では、体験活動が豊富であっても、学習が「楽しかった」「見つけた」といった感想段階にとどまり、対象理解や意味付けにまで至らないという課題が指摘されてきた。とりわけ、体験活動後の表現活動が単なるまとめや成果発表として位置付けられることで、体験が学びとして十分に成立しにくい状況がある。

本研究は、こうした課題意識のもと、生活科における表現活動を「直観的表現」「内省的表現」「共有・相互学習的表現」<sup>図1</sup> <sup>図2</sup> という段階的な構造として捉え直し、体験を起点とした学びがどのように成立していくのかを実践を通して、明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

本研究は、小学校第1学年1学級を対象とした実践研究である。単元「がっこう さいはっけん」において、学校探検を核とした学習を構成し、体験と表現が往還する学習過程を意図的に設定した。

具体的には、他県中の写真・動画・簡単なメモによる直観的表現、探検後に体験を振り返り、意味付けを行う内省的表現（カードや造形表現等）、さらに個々の表現を壁面構成を通して共有する共有・相互学習的表現を段階的に位置付けた。

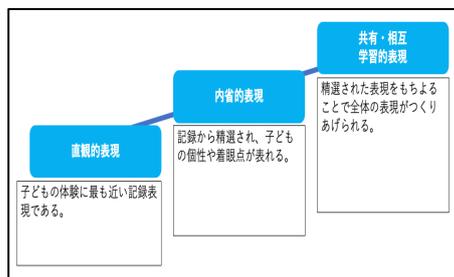


図1 3つの表現（表現活動の構造化）



図2 生活科における授業づくりにおける3つの表現の位置付け（文部科学省 齋藤教科調査官配付資料に筆者が加筆）

分析資料として、児童の記録、作品、発話、壁面構成を収集し、質的に分析することで、表現活動を通じた児童の認識の変容を検討した。

## 3. 結果

分析の結果、「3つの表現」を段階的にくぐり抜けることで、児童の表現内容と認識に明確な変容が見られた。直観的表現では「見た」「あった」といった対象への注目が中心であったが、内省的表現では、「～だから」「～のため」といった意味付けが加わった。さらに、共有・相互学習的表現では、「わたしたちのために」「みんなを支えている」といった、自分と他者、生活との関係性を意識した表現が増加した。

このことから、体験が一過性の出来事として終わるのではなく、表現活動を通して意味付けされ、他者との関わりの中で再構成されることで、学びとして成立していく過程が確認された。

## 4. 考察

本実践において、学びが成立した要因は、実感を伴う表現活動が学習過程の中核として構造的に位置付けられていた点にあると考えられる。直観的表現による実感の保持、内省的表現による意味付け、共有・相互学習的表現による再構成という過程を経ることで、児童の認識は段階的に深まり、生活との結び付きが強化された。

また、こうした表現活動は生活科にとどまらず、国語科における「書くこと」「話すこと」の内容の充実にも寄与しており、体験を基盤とした教科横断的な学習の可能性を示唆している。表現活動を学習の終末に位置付けるのではなく、学びを進める中核的活動として設計することの重要性が明らかになった。

## 主な参考文献

教育課程部会 生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ (2025) 「生活科の学びの本質的な意義について」 p. 2  
 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領生活編』 東洋館出版社  
 宇佐見香代 (2015). 「『奈良さんぽ』学習にみるフィールドワーク体験学習の意義」 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 pp. 73-80  
 嶋野道弘 (1996). 『生活科の子供論』 明治図書 p55-57  
 ヘルマン・ノール 久野昭 監訳 (1987) 『ディルタイ 生の哲学』 p. 161-173